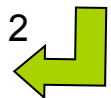


第117話 「大学授業設計の点検ワークシート」の提案

- 日本教育工学会FDセミナー(2012.2.20.開催)で使うために
開発中(未使用につき、まだ危険な状態です)
- 点検項目は次の6+2つ:まず記述式(次にチェックリスト式?)
 1. 誰に何を教えようとしているか(受講者数含む)
 2. それは何故か(前提・後続科目の有無を含む)
 3. どうやって教えているか(授業ルーチン含む)
 4. それは何故か(講義をやめる可能性含む)
 5. 単位取得の要件は何か(最終試験をやめる可能性含む)
 6. それは科目の目標と合致しているか(その理由含む)
 7. 続けたい点は何か
 8. 変えたい点は何か
- これまでの類似の試みに、企業向けの研修設計の視点ワークシート(2011)・OPTIMALモデル(2008)・IDの5視点(2005)・教材改善のためのチェックリスト(2002)などがありましたっけ

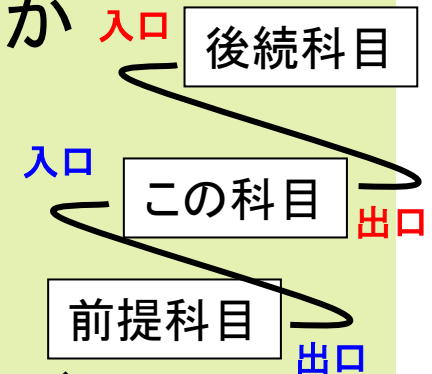
1. 誰に何を教えようとしているか (受講者数含む)

- シラバス情報: 科目目標(ねらい)は、科目修了時点で学生ができるようになることとして書いてあるか? それは履修前にはできないことか? 門外漢が読んでもねらいが分かるか?
- 受講の前提要件・必要科目は明示されているか?
- 科目のねらいと15回の授業それぞれで扱う内容の対応関係が分かるか? バランスはよいか?
- 不要なものはないか? 他に扱うべき項目はないか?
- すべてが全員に必要な項目か、オプションでよい項目は?
- 科目修了時のねらいと将来的波及効果が区別されているか
- およその受講者数: ()人×()クラス/学期
 - 同科目の他担当者は: いる いない
 - 必修か選択か?



2.それを教えているのは何故か (前提・後続科目の有無を含む)

- この科目がカリキュラムになぜ存在するのか
 - 育てたい人材像に貢献できる科目内容か？
 - 時代の要請に合致している科目内容か？
 - 学生のニーズに合致している科目内容か？
- 前提・後続科目とこの科目との関係(出入口)
 - 前提科目の成果として期待できることは何か？
 - 後続科目から成果として期待されていることは何か
- 科目の出入口を変更しないでもいいのか？
 - 教育課程全体における位置づけは現在のままでよいのか？



3. どうやって教えているか (授業ルーチン含む)

- 授業ルーチン(毎回の授業でやること、決まりごと)は何か？
- 進め方は文書化されているか？ 記録はあるか？
- 15回同じパターンか、変化・展開があるか？
- 予習・復習の具体的指示はあるか？ やっているか？
- 学生は受動的か能動的か、混合型か？ その割合は
- 情報源は豊富に用意されているか？ 必須だけか？
 - 教科書・参考文献・Webサイト・ビデオ……
- 一斉指導・グループ活動・個人活動の割合は？
- 学習方法は全員に同じか、選択肢が用意されているか？

4. そう教えているのは何故か (講義をやめる可能性含む)

- どうしてそういう教育方法にしたのか？
 - 慣習・自分が習った方法・経験上の工夫・他の実践をベンチマーク(まねした・改良した)
- 効果的か、効率的か、魅力的か？
 - 科学的な裏づけはあるか？ 意識しているか？
 - 学生のニーズに呼応した教え方か？ 自己流か？
- 学生らしさが育つやり方か？ 親切すぎないか？
 - 自己主導学習の力がつきそうか？
 - 自分で考える・選択する余地を与えているか？
- 講義をやめる・減らす可能性： やってない・ ある・ あるかも・ まずない・ 続けたい



5. 単位取得の要件は何か (最終試験をやめる可能性含む)

- 出席(平常点) + レポート + 試験 + α
 - 何をいつ何回やっているか?
 - それはどうしてか? 大学の決まり・自分で決断した
 - 教員・学生の労度と公平性に問題ないか?
- 試験期間だけ勉強すれば単位が取れるようになっていないか
- LMSを利用して評価の頻度を高める可能性は? → [第77回](#)
- できるだけ多くの学生が良い成績をとるように評価上の工夫はできないか(例: 再チャレンジを認める)
- 最終試験をやめる可能性: やってない・ ある・ あるかも
• まずない・ 続けたい
 - なぜやめられないか?



6. 単位取得の要件は科目の目標と合致しているか(その理由含む)

- 科目目標とのずれはないか(妥当性)?
 - 完全一致・だいたい一致・部分的にのみ一致・一致していない・不明
- 評価の方法は、科目目標を網羅している(山掛けが通用しない)か? ねらいとして掲げたことをカバーしているか?
- この科目で重要視していることがすべて単位取得要件に組み込まれているか(例: 積極性、貢献度、切厳守)
- 単位取得要件と評価方法はあらかじめ学生に知らされているか(驚きはないか)?
- 丸暗記ではなく深い理解や応用力の育成をねらっているか
- 輩出したい人材像に近づく一助になっているか
- 目標か評価方法を変更する必要はないか?



研修設計の視点ワークシート (記述式)

JMAセミナー2011.10.15

この例は(ダメな例・良い例)
どちらかに○

1. 何を(誰に)教えているか
2. それは何故か
3. どうやって(いつどこで)教えているか
4. それは何故か
5. ダメ・良いとした理由は何か
6. 何かその証拠は何か

JMAセミナー 研修設計の視点ワークシート(記述式)

氏名 _____

この例は(ダメな例・良い例)どちらかに○ 記載日: 年 月 日

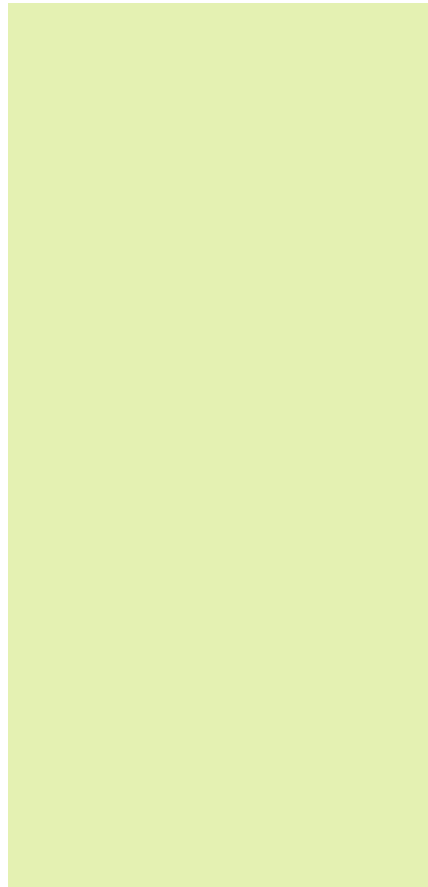
視点	記述欄
事例名	
何を(誰に)教えているか	
それは何故か	
どうやって(いつどこで)教えているか	
それは何故か	
ダメ・良いとした理由は何か	
その証拠は何か	

©2011 Katsuaki Suzuki & Katsuo Hayakawa, Kumamoto University.

©2011 Katsuaki Suzuki & Katsuo Hayakawa. Kumamoto University



OPTIMALモデル (鄭・久保田・鈴木 2008)



©2012 鈴木克明

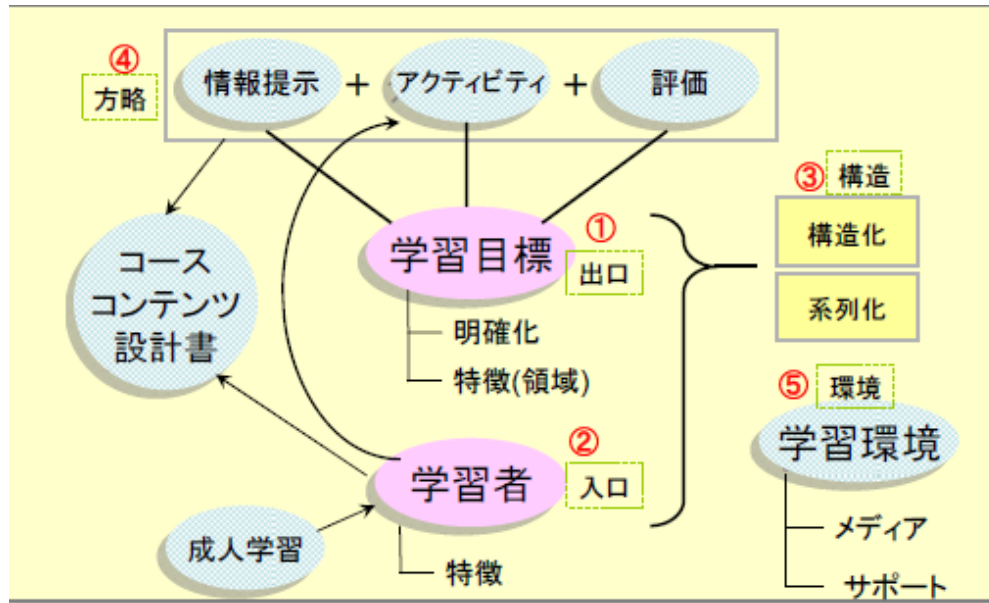
◀ 教授システム学専攻

eラーニング推進機構eラーニング授業設計支援室
ランチョンセミナー

◀ Kumamoto University



IDの視点とその関係図 (鈴木・根本 2005)



チェックリスト(徐々に改良中)→
eLP研修版(鈴木・根本 2005)
「消防研修」掲載版(鈴木 2008)
企業研修版(鈴木 2011)

■ 教育活動をIDの視点からチェックしよう

自分で教育活動を計画する前に、お気に入りの(あるいは何とかしたいと思っている)既存の研修や学習コンテンツをIDの視点から点検してみよう。なぜお気に入りのものの裏づけを考えてみる。どこを変えることができそうかを考えてみる。それがID的なものの見方を身につけることにつながる。

①出口：学習目標の設定と評価方法の妥当性

OK・NA・NG	研修の成果を「学習時間の長さ」ではなく「学習成果の到達度」で判定しているか
OK・NA・NG	学習目標が学習開始時に、学習者にわかりやすい言葉で提示されているか
OK・NA・NG	合格基準や制限時間などの評価条件があらかじめ提示されているか
OK・NA・NG	事後テスト合格者は教材の目標をマスターした人だと自信をもって言えるものか
OK・NA・NG	事後テストには目標とした学習項目全部をカバーするように色々な問題が十分あるか

②入口：成人学習理論とターゲット層

OK・NA・NG	学習者が有資格者かどうかを自己判断できる材料があるか
OK・NA・NG	有資格であることを確認させることを、自信をもたせることにつなげているか
OK・NA・NG	研修を受ける必要がない人と必要がある人を判別する仕組みがあるか(事前テスト等)
OK・NA・NG	学習の進め方や用意されている各種オプションの存在と使い方が分かるか
OK・NA・NG	自分のベーススタイルで学習を進めるための工夫があるか

③構造：研修要素からの項目立て

OK・NA・NG	スケジュール表などがあり、研修の全体像がわかるか
OK・NA・NG	不要な研修を避け、学習開始直後にニーズに応じた研修へアクセスできるか
OK・NA・NG	易しいものから難しいものへと順序だてられているなど研修項目間の関係がわかるか
OK・NA・NG	選択可能事項が適切に設定されていて、選択についての助言が与えられるか
OK・NA・NG	学習完了に対する進み具合が学習者にわかり自分で進捗管理できる工夫があるか
OK・NA・NG	短い部分に分割されており、飽きないような工夫があるか

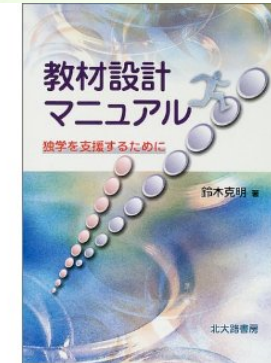
④方略：学習目標の達成を支援する研修内容・方法の工夫

OK・NA・NG	何についての情報提示かが明らかか(タイトルや見出し)
OK・NA・NG	すでに知っていることと関係づけながら新しい情報を提示・解説しているか
OK・NA・NG	文字情報は、図表を用いて構造化され相互関係の理解を助けているか
OK・NA・NG	文字情報以外のイラスト、写真、動画、ナレーション等は学習効果を高めているか
OK・NA・NG	習得状況を自分で確認しながら学習を進められるか(例：メニュー項目ごとの練習)
OK・NA・NG	誤りを気にしないで試せる状況(リスクフリー)で練習をする機会が十分にあるか
OK・NA・NG	事後テストと同じレベル(難易度/回答方法)で仕上げの練習をする機会があるか
OK・NA・NG	苦手なところ/覚えられない項目を集中して練習する工夫があるか

⑤環境：適切なメディアの選択とサポート体制の確立

OK・NA・NG	学習目標の達成を支援するためにメディアが効果的に使われているか
OK・NA・NG	学習環境やコンテンツ開発上の制約に応じて適切なメディアが使われているか
OK・NA・NG	持続的に学習を進めていけるようなサポートが準備されているか

注：OK=大丈夫・NA=該当しない・NG=不十分などところがある

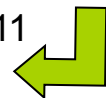


教材改善のためのチェックリスト(2002)

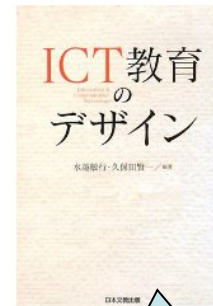
「教材設計マニュアル」資料8(一部)

- (8-1) 出入口の明確化について
 - (8-1-0) 使用した全部のテストについてそれぞれチェックする項目
 - OK・NA・NG 筆記式テストの他の形式(選択、穴埋め、記述式)の方がよくなかったか
 - OK・NA・NG 筆記式以外のテストが必要なかったか(特に運動技能の場合)
 - OK・NA・NG できなくても/知らなくても答えられてしまわないか
 - OK・NA・NG 答えやヒントは見せないでテストを受けさせたか
 - OK・NA・NG 偶然正解する可能性は高くなかったか
 - OK・NA・NG 項目数は必要かつ十分であったか
 - OK・NA・NG 回答時間が短い場合、もう少し項目数を増やした方がよくないか
 - OK・NA・NG あらかじめ設定した合格基準(チェックポイント)は十分使えたか
- (8-1-1) 前提テストについての項目
 - OK・NA・NG 資格の不十分な人と十分な人を判別できたか
 - OK・NA・NG 口頭で質問しただけだった場合、実際にやらせる必要はなかったか
 - OK・NA・NG 前提とした資格は教材を進めるうえで本当に必要だったか
 - OK・NA・NG 前提テストの項目以外に教材を進める上で不可欠な前提資格はなかったか

• OK(問題なし)、NA(Not Applicable; 関係なし)、NG(No Good; 問題あり)



第77話

eラーニングをここから始めよう：
『ICT教育のデザイン』第8章から

そう言えば
どこかで
似たような
話が...

本の内容は？

a. ネタ探し(情報検索)

→自己ベストでは不十分。せつかくの情報をみんなで共有するのは、IDが目指す効率を高める。

b. 学習者用リンク集(ポータルサイト)

→あるものは活用する。メンテナンスは調査・報告課題として学生にやらせると、教員は楽ができて学生の自己学習力も育成できる。

c. 確認クイズ(出席点代わりに毎回用いる)

→基礎知識の確認手段として有効。講義が理解できたか自分で確認する手段を提供。合格するまで何度も挑戦させる。記録も残る。

ごく最近も
似たような
話が...

d. 掲示板での意見交換・グループ作業・相互評価

→応用力育成に有効。自主性に任せてはいけない。採点基準を明示して点検者の指摘事項の妥当性も採点の対象とすることもできる。

e. 学習成果の集積と発表(ポートフォリオ)

→リフレクションとアピール力育成に有効。専用システムを整備して機関として取り組むと、教育目標と科目課題との関係が整理できる。

水越敏行・久保田賢一 (編著)

『ICT教育のデザイン』

日本文教出版、2008年



- 序章 情報通信技術 (ICT) の発展と教育の展望
- 第1章 子どもの発達とメディア
- 第2章 ICT活用と思考力の育成, 及び評価の在り方
- 第3章 武蔵大学ケータイ・ワークショップ:
メディア・リテラシーの展望
- 第4章 デジタル・コンテンツの活用を支援するために
- 第5章 先端技術を活用した教育の考え方
- 第6章 情報モラル教育・情報倫理教育の在り方
- 第7章 ICT活用授業力向上のための教師コミュニティ
- 第8章 eラーニングとインストラクショナルデザイン**
- 第9章 教科と総合学習におけるメディアの役割
- 第10章 教科「情報」におけるICTの位置づけ
- 第11章 インターネットを活用した交流学习
- 第12章 海外との交流学习の展開
- 第13章 国際交流イベントのデザイン
- 終章 座談会: ICT教育のこれから

ICTを活用した教育について勉強する大学生, 及び初等中等教育の教員のための入門書。「ICT教育」の最新の事例を元に以下のような内容で構成し, その多様な学習活動の意義を総体的に理解できるように努めました。大学の講義の回数に合わせて, 13章構成とし, 各章の終わりには研究課題を設定しています。



IDポータルへようこそ！

このサイトは、ID(Instructional Design:インストラクショナル・デザイン)の学習者がIDについて学ぶことを支援するために構築しました。初めての方は、[本サイトについて](#)をお読みください。

■直近イベント情報

- 2011/02/19(土) ~ 2011/02/20(日)
日本教育工学会2010年 冬の合宿研究会@チサンホテル札幌
- 2011/03/03(木) ~ 2011/03/04(金)
第3回 日本医療教授システム学会総会@学術総合センター(東京)
- 2011/03/05(土)
日本教育工学会研究会「学校現場に対する支援/一般」@静岡大学
- 2011/03/19(土)
教育システム情報学会2010年度第6回研究会:情報教育の国際化/一般@九州工業大学
- 2011/03/28(月) ~ 2011/04/01(金)
Global Learn Asia Pacific 2011@Melbourne, Australia
- 2011/05/14(土)
日本教育工学会研究会「ICTを使ったインフォーマルラーニング支援/一般」@金沢大学
- 2011/06/27(月) ~ 2011/07/01(金)
ED-MEDIA 2011@Lisbon, Portugal
- 2011/09/17(土) ~ 2011/09/19(月)
日本教育工学会第27回全国大会@首都大学東京(南大沢キャンパス)
- 2011年1月28日(金)
第19回 SEA新春教育フォーラム「社会的障害への教育のチャレンジ」(主催:ソフトウェア技術者協会)

[もっと先のイベント](#)

■最新トピックス

- 2011/01/14 IDマガジン第36号を発行しました

©2011 鈴木克明

eラーニング推進機構eラーニング授業設計支援室
ランチョンセミナー

 鈴木克明教授 Webサイト

 北村士朗准教授 ホームページ

 根本淳子助教 Web サイト

 LUNCHEON SEMINAR
ランチョンセミナー

 ラーニング・ファンダメンタル
Learning x Fundamental 学習支援サイト

 放送大学 人間情報科学とeラーニング
学習支援サイト

 なるほどネット
オンラインドリル作成ツール
ドリル工房

 ARCSモデルに基づいた
授業・教材改善方略ガイドブック

 岩手県立大学ソフトウェア情報学部 鈴木研究室
教育情報システム学講座

おすすめ情報

2006年度から開始された放送大学大学院教育開発プログラム「人間情報科学とe-ラーニング」の第5回~8回までを鈴木先生が担当されます。

<http://www.u-air.ac.jp/hp/kamoku/H19/daigakuin/kyoiku/8940207.html>



4. B, D

解答を保存

2. 【第1回】問題1(2) (点数: 80)

次の文章の空欄に正しい(テキストに記載してある)語句を入力しなさい。

学習における情報(①)能力を育てることは、すなわち(③)ができるということの意味する。

「独学を支援する教材」を使う経験を等して、学ぶ側はどうしたら自分で(④)的に学ぶことができるかを知ることができる。一方、教材を作る経験を通して、教える側は、どうしたら学びを(④)的に(⑤)することができるのかを知る手がかりになる。

沼野一男が述べた「教える」の2つの捉え方は、教えようとして努力していることを重視する「(⑥)教育観」、教えられている側が、何かをそこから学んでいるか、学びを支援できているかを重視する「(⑦)教育観」と呼ばれる。

「たとえ教師がどんなに一生懸命教えようとする意図を持っていたとしても、実際に生徒が何らかのことを学ばなければ教師が教えたとは言えない」という考えは「(⑦)教育観」に基づくものである。この立場に立った教える側が気になるのは「自分の意図がどの程度うまくいったのか？」であり、その疑問に答えるためには「自分が生徒にいったい何を学んで欲しいと願っているのか(⑧)」を確認すること、「学びが成功した

時間 18:05:13

許可 --:--:--

残り --:--:--

質問ステータス

未解答

解答は保存されません

解答済み

1

2

ページが表示されました

インターネット

目次:

8. 遠隔教育における実験等

1. [第8回について](#)
2. [遠隔教育における実験等\(テキスト\)](#)
3. [小テスト](#)
4. [Aグループディスカッション\(ブロック2\)](#)
5. [Bグループディスカッション\(ブロック2\)](#)
6. [Cグループディスカッション\(ブロック2\)](#)
7. [Dグループディスカッション\(ブロック2\)](#)
8. [課題2-1](#)

メッセージを作成

すべて展開

すべて折りたたむ

- 件名 
- 目-まとめ役のお願い 
 - Re:まとめ役のお願い
- 目-ディスカッション開始 
 - 【まとめ】
 - Re:【まとめ】への見解
- 目-【確認事項】 
 - 【ステートメント導出】
- 合言葉の変更
- 目-前回までのグループ討議の報告  
 - インターネット以降
- 目-第1ブロックEグループの問題点() 
 - 【質問】
 - Re:【質問】
 - Re:【質問】
 - Re:第1ブロックEグループの問題点()
 - Re:第1ブロックEグループの問題点()
 - Re:第1ブロックEグループの問題点()
 - Welcome!
- 目-今回の課題まとめに関する質問 
 - Re:今回の課題まとめに関する質問
 - Re:今回の課題まとめに関する質問
- 論議領域への接近
 - Re:論議領域への接近
 - 地理とトポロジー イメージをすこし集めました クリックすると画像を見られます
 - 第1グループで出たトピックスの一覧

ment



キーノートスピーチでのメッセージ

@第5回看護系大学eラーニング交流会

「eラーニングを次のステージへ:作る、運営する、評価する」

(産業医科大学2011.1.29)

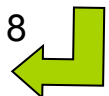
- (評価)今どのステージにいるかを把握しましょう:悩みの分類学「レイヤーモデル」
- (制作)隣の芝生を参考に次のステージに進みましょう:**つぐらないeラーニング?**
 - 他人が作ったものを使わせてもらう;他人のアイデアを盗む;出典を明記して感謝する
 - 中長期的にもとがとれることにしか手を出さない:適正初期投資量
- (運営)eラーニングはまずここから始めよう:自動採点・自動記録に頼る運営
 - 教師が楽をして学生がせつせと励む構造をつくる;**省力化・未完成品・リピート**の勧め
 - 人間がしないでもいいような低レベルなことは機械に委ねて余力を生み出す
- (評価)eラーニングを目的から手段へ変えよう:**評価から逆算する焦点化設計**
 - 余分なことは学生の迷惑;強制は出会わせるためだけ、あとは自主的にたつぷりと
- (評価)学生の学習力アップのためにeラーニングとIDを使おう:**教えないで教育する?**
 - 講義は情報提供以外に使う時間:予習の成果を確認する時間:共同練習の時間
 - IDを学習のヒントとして学生に教えれば、教えないでも育つ学生が育つ



第1話 熊大ポリシーの目指すもの

続けない＋教えない＋作らないeラーニング

- eラーニング推進のための科目間横断ポリシー（略称：熊大ポリシー）として、「リンク集＋毎回クイズの整備＋α」を提案します。
- 続けない＋教えない＋作らないeラーニング
 - 続けない＝今までの教育方法を再検討する
 - 教えないで学ぶ環境を提供する（SDL）
 - 作らない＝あるものは使う→共有物を作る
- 実現しようとする理由は、IDによる大学教育刷新
 - eラーニング推進機構は下請け機関ではない！
 - そんなに強気に出てよいのか？ 強気に出る準備はOK？



熊大ポリシー(案)

リンク集＋毎回クイズの整備＋ α

- リンク集＝科目に参考になる公開サイトリスト
 - 使えるものは使わせてもらう：無駄な開発を防止
 - Webサイトの利用方法を学生に教える
- 毎回クイズ＝講義内容の理解を確認する10問程度の多肢選択式(自動採点可能)問題
 - 出席点代わりに使う：何回でもチャレンジ可能にする
 - 作問することで講義内容を焦点化・再設計できる
- $+\alpha$ ＝担当教員が希望する上記以外の目玉的要素
 - 予算内で要望にこたえる：毎回クイズ作成の交換条件
 - 作成側のスキルアップをねらう：少しずつ開発：逆提案も



「続けない＋教えない＋作らないeラーニング」の出典

- [2006.11.30\[PDF\]](#) 講演「セッション1:続けないeラーニング、セッション2:教えないeラーニング、セッション3:作らないeラーニング」, [eラーニングフォーラム2006WINTER](#) (トラックB:「続けない＋教えない＋作らない＝次世代IDの勧め」), 青山学院大学(北村士朗・市川尚と共同発表)
 - 事例①:熊本大学全学eラーニング推進への取り組みp15
 - 熊大方式全学eラーニングコンテンツの作成方針(鈴木私案)



ランチョンセミナープレゼンスタイルの提案

- 1枚目にリンク付の要約を用意する。
- リンクは、2枚目以降へのリンクと外部資料へのリンクを含めることができる。
- 発表者は1枚目を5－10分程度で話す。
- 2枚目以降には補足資料を用意する。
- 2枚目以降は参加者の求めがあった場合に限り、求めに応じて表示することができる。
- 以上のプレゼンスタイルを本発表で例示する。
- アーカイブビデオは1枚目についての発表とそれ以降を分割して公開する。

